サイエントロジー：その宗教性の特徴

フランク・K. フリン博士
宗教学助教授

ワシントン大学
アメリカ合衆国ミズーリ州、セントルイス

1994年9月22日

サイエントロジー：
その宗教性の特徴

サイエントロジー：
その宗教性の特徴

目次

I. はじめに 1

II. 教義 3

III. 宗教的実践 8

IV. 教団 9

V. サイエントロジー礼拝 10

フランク・K. フリン博士
宗教学助教授

ワシントン大学
アメリカ合衆国ミズーリ州、セントルイス

1994年9月22日

サイエントロジー：その宗教性の特徴

I.
はじめに

現在、私は神学と宗教の分野で作家、編集者、講師、そして顧問として自活している。また、ミズーリ州セントルイスのワシントン大学で宗教学の助教授をしている。

イリノイ州クインシーのクインシー大学で哲学学士（1962年）、マサチューセッツ州ケンブリッジのハーバード神学校で神学学士号第二位優等（1966年）、オンタリオ州トロントの聖ミカエル大学トロント神学部から特別宗教研究で博士号（1981年）を取得している。また、ハーバード大学、ドイツのハイデルベルグ大学、ペンシルバニア大学で研究を行ったこともある。ハイデルベルグ大学では哲学と古代中近東宗教のフルブライト研究員（1966–1967年）だった。ペンシルバニア大学では国防省外国語研究員（1968–1969年）としてセム語を研究した。

1962年から、古代と現代の宗派運動について集中的に研究してきた。博士論文の一部は、合衆国と海外における第二次世界大戦後の宗教運動に特に割いている。その中で、新宗教の教義、在り方、宗教用語の使い方、指導者、動機と真剣さ、教団の物理的状況を調査した。ワシントン大学では常に、新宗教運動を含んだ北米の宗教体験と題した講座を教えている。宗教についての学究的な興味の他に、個人的にも、私は長期にわたる宗教生活を体験している。1958年から1964年まで、一般にフランシスコ派として知られている、フランシスコ会に所属していた。その間、私は厳粛な貧困、純潔、従順の誓いを守って暮らしたため、宗教生活における典型的な修養を経験した。

現職に就く前、ミズーリ州セントルイスのメルヴィル大学で教鞭を取り（1980–1981年）、それ以前には、宗教教育修士課程の指導教官（1977–1979年）、オンタリオ州トロントのトロント大学比

較宗教講師（1976–1977年）、ニュー・メキシコ州サンタ・フェの聖ジョーンズ大学経典研究講師（1970–1975年）、ペンシルバニア州フィラデルフィアのラ・サール大学で聖書研究と宗教人類学の夏期講師（1969–1973年）、マサチューセッツ州ボストンのボストン大学で聖書研究講師（1967–1968年）、マサチューセッツ州ニュートンのニュートン聖心大学で聖書研究講師を勤めた。

私は、アメリカ宗教学会の正会員である。また、ミズーリ州ユニバーシティ市のセイント教会では教えを実践するローマ・カトリック教徒でもある。

1968年以来、私は19世紀と20世紀に北米ならびに海外で新たに興ったさまざまな宗教運動について講演し、執筆してきた。宗教の人類学（ラ・サール大学）、比較宗教（トロント大学）、アメリカの宗教体験（セントルイス大学）、そして、北米宗教体験（ワシントン大学）といった講座では、大覚醒、シェーカリズム、モルモン教、セブンスディ・アドベンティスト、エホバの証人、ニュー・ハーモニー、オナイダ共同村、ブルック・ファーム、統一教会、サイエントロジー、ハーレ・クリシュナの他にも、さまざまな宗教的現象を取り上げた。私はいくつかの論文を発表し、新宗教についての書籍監修もした。長期にわたり、直接知り得たことでなければ、現存する宗教について発言しないという主義である。合衆国議会、オハイオ州議会、ニューヨーク州議会、イリノイ州議会、カンザス州議会で新宗教のさまざまな面について証言してきた。大学や国内、カナダ、日本、中国、それにヨーロッパでの会議において新宗教に関する講演を行ってきた。

私は、1976年からサイエントロジー教会について深く研究してきた。膨大なサイエントロジー教典のうちから、ここで述べるような意見を形成するに十分なだけのものを読んできた。トロント、セントルイス、オレゴン州ポートランド、フロリダ州クリアウォーター、ロサンゼルス、パリのサイエントロジー教会を訪れ、教会の日常活動に慣れ親しんだ。また、サイエントロジーの会員と何度も面談した。さらに、好意的なものも批判的なものも含めて、客観的な学問的研究からジャーナリスティックな報道に至るまで、サイエントロジーに関する文献を読んできた。

宗教の比較研究者として私は、ある運動が宗教であるために、またある集団が教会と呼ばれるためには、3つの特徴、あるいは象徴を備えていなければならないと考える。以下にその3つの特徴を述べる。

(a) 第1に、宗教は、神、絶対者、内なる光、無限といった、信者を生命の究極の意味に結び付ける教義あるいは教理を持っていなければならない。

(b) 第2に、教義の体系は、宗教実践に反映されなければいけない。それは次のような形で表される。1) 行動の規範（積極的な指示あるいは否定的な禁止やタブー）そして2) 儀式や祭典、祈りその他の儀式（聖餐、入会、叙階、説教、祈祷、葬儀、結婚、瞑想、浄化、教典学習、祝福）。

(c) 第3に、教義の体系と実践とは、階層的であれ、組合教会的な組織であれ、それとわかる**共同体**を形成し、信者集団や個々の会員を結び付けるものであり、信者の理解における人生の究極的な意味と調和する精神的な生き方を持つものでなければならない。

すべての宗教がこうした特徴のひとつひとつを同程度に、あるいは同じように重視するわけではないだろうが、みな、上記の要素を明らかに備えているはずである。

これら3つの特徴と自身のサイエントロジー教会についての研究から、私は自信を持ってサイエントロジー教会は正真正銘の宗教であると言うことができる。同教会は既知の世界中の宗教が備えている宗教を特徴付ける要素をすべて備えている。すなわち、(1) 明確に定義された教義を持つ。(2) 教義は宗教的実践すなわち、良いまたは悪い行動基準、宗教儀式と式典、そして宗教的行為とその遵守といった形で表現される。(3) 信者は、他の宗教団体とは明確に区別される宗教団体となっている。

II.
教義

サイエントロジー教義については、膨大な量の資料があり、これを研究しようとする者はそれらを渉猟（しょうりょう）しなければならない。研究者はまた、サイエントロジーが歴史上のあらゆる宗教的伝統と同じく、それ自体の生命を持ち、これまでも、またこれからも変化し続けているものであるということを念頭に置かなければならない。主要な教典として、L. ロン ハバードの『ダイアネティックス：心の健康のための現代科学』、『サイエントロジー：思考の原理』、「フェニックス講演」、その他大量のトレーニングや管理運営についての参考書があるが、これらはサイエントロジー教典のごく一部に過ぎない。中心となるのは、トレーニングとオーディティングに関するサイエントロジー教義すべての唯一の発案者であるL. ロン ハバードの著作である。

サイエントロジストとの面談と教義の研究から、サイエントロジストは人間の本質は善である、精神は救われる、心と身体の治療は精神に始まる、といった基本的な教えに忠実であるということが明らかになった。サイエントロジーは次のように教える。

この教会の私たちは信じます。

すべての人間は、いかなる民族、肌の色、信条であろうと、平等な権利を与えられて創造されたこと、

すべての人間は、自分自身の宗教的な実践および執行に関する、侵すべからざる権利を持っていること、

すべての人間は、自分自身の生命に関する、侵すべからざる権利を持っていること、

すべての人間は、自分の正気に関する、侵すべからざる権利を持っていること、

すべての人間は、自分自身の防衛に関する侵すべからざる権利を持っていること、

すべての人間は、自分自身の組織、教会、政府を、創造したり、選択したり、援助したり、支持したりすることに関する、侵すべからざる権利を持っていること、

すべての人間は、自由に考えること、自由に話すこと、自由に自分自身の意見を書くこと、そして他の人々の意見について反論し、発言し、あるいは書くことに関する、侵すべからざる権利を持っていること、

すべての人間は、自分自身の種の創造に関する、侵すべからざる権利を持っていること、

人間の魂が人間の権利を持っていること、

心の研究および精神的に引き起こされた問題の治癒が、宗教から引き離されたり、非宗教的分野で黙認されるべきではないこと、

そして、神にまで至らないいかなる力も、あからまにせよ、密かにせよ、これらの権利を保留したり、顧みない権限を持っていないこと。

そして、この教会の私たちは信じます。

人間は本来善であること、

人間は生存を求めていること、

人間の生存は、自分自身に依存し、自分の仲間に依存し、そして人間がこの宇宙との人類愛を達成することに依存していること。

そして、この教会の私たちは、神の法が人間に次のことを禁じると信じます。

人間自身の種を破壊すること、

他の人の正気を破壊すること、

他の人の魂を破壊したり奴隷化すること、

自分の友や自分のグループの生存を破壊したり、減ずること。

そして、この教会の私たちは信じます。

精神が救われ得ること、

そして精神のみが身体を救い、あるいは治すことができることを。

この教義は、サイエントロジーの教える「8つのダイナミックス」を敷衍（ふえん）し、補うものである。「ダイナミックス」とは、自己、性（家族の生殖を含む）、人類全体、あらゆる生き物、あらゆる物質宇

宙、さらには神または無限のレベルでの、生存しようという意思や衝動である。サイエントロジーについて一般に言われていることとは違い、サイエントロジー教会は、精神面、とりわけ、超越的な存在についての信条をずっと保ってきた。『サイエントロジー：思考の原理』の初版では、「第8のダイナミック ― これは無限として存在しようとする衝動です。これはまた至高の存在と見なすことができます。」（『サイエントロジー：思考の原理』ロサンゼルス、サイエントロジー教会、1956年刊、38ページ）と言明している。一般の信者は、サイエントロジーを信奉する中で、8つのダイナミックスのすべてにおいて、できる限り完全に自己を実現し、至高の存在、またはサイエントロジストの好む表現で言えば、無限についての理解を深めることを期待されている。

サイエントロジストは、人間の精神的本質を「セイタン」と呼ぶが、これは伝統的に魂と言われてきたものと同じである。彼らは、セイタンが不死の存在であり、過去の生においてさまざまな肉体に宿ってきたと信じている。サイエントロジストの前世についての教義は、仏教でいう「samsara」、魂の輪廻に通じる点が多い。魂についてはIII（a）でさらに詳しく述べるとしよう。

サイエントロジーの教義は、ニカイア公会議（325年）での古典的なキリスト教の教義やルーテル派教会のアウグスブルグ信仰告白（1530年）、長老派教会のウエストミンスター信仰告白（1646年）に比肩する。なぜなら、これらの古い教義同様、サイエントロジー教義は、信者のために生命の究極の意味を定義し、教義にかなう行動や礼拝形態を整え、教義に従う教団を規定していると言及しているからだ。伝統的な教義と同じように、サイエントロジー教義は、魂、精神的な逸脱または罪、救済、精神による癒し、信者の自由、精神におけるすべての人の平等といった、超越的な現実に意義を与える。

教義に従って、サイエントロジストは、「反応的」または受動的（無意識）な心と、「分析的」または能動的な心とを区別する。反応心は、信者が呼ぶところの「エングラム」、すなわち痛み、傷、衝撃の精神的痕跡を記録する。反応心は胎児期、さらには過去の人生にまでさかのぼるエングラムを記録していると考えられている。エングラムの神学的意味は、仏教において、過去に重ねてきた転生から持ちこされ、解脱を妨げるとされているもつれた糸の教えによく似ている。サイエントロジストは、エングラムから自由にならなければ、8つのダイナミックスの各レベルにおける幸福、知性、精神的な健康の生存能力は、はなはだしく損なわれるだろうと信じている。この精神的な知識についての信条に基づいて、信者たちはサイエントロジーの宗教実践の中心である、数多くのレベルのオーディティングやトレーニングを重ねていくよう、動機付けられているのである。オーディティングとトレーニングについては(3）でさらに詳しく述べる。オーディティングやトレーニングの課程の新しい信者や初心者は、プリ・クリアーと呼ばれ、すべてのエングラムを取り除いた人はクリアーと呼ばれる。この区別は、キリスト教の罪と恩寵、仏教での無明（サンスクリットで、avidya）と悟り（bodhi）との区別に対応しよう。

サイエントロジストは「クリアリング」を個人の幸福についてだけ結び付けて考えていない。彼らは、オーディティングとトレーニングは、その人の家族環境と影響の及ぶ範囲に良い影響があると信じて

いる。つまり、良い影響は8つすべての「ダイナミックス」に現れるのである。サイエントロジストはまた、自分たちの周りの世界をより良くする責任を持つべきであり、他の人がクリアーに達するのを助けるべきだと信じている。また、十分な数の人々がクリアーに達すれば、L. ロン ハバードが宣言したように、サイエントロジーが標榜する「狂気もなく、犯罪もなく、戦争もない、そこでは有能な者が栄え、正直な者が権利を有し、人が自由に、より高い境地に上がっていけるところ」が成し遂げられたことになる（L. ロン ハバード著『サイエントロジー 0-8：基本の書』、3ページ）。不信、戦争、自己破壊につながる状態を除こうと探究することにおいて、サイエントロジーは他の伝道団や福音主義的宗教、例えば仏教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教と異なることはない。

サイエントロジーの新しい文明を築くために「地球をクリアーにする」という目的の3つの面は、サイエントロジー教会の過去から現在に至る偉大な歴史的宗教のありように、完全にかなっていることを示している。3つの面とは、(a) 伝道団的性格、(b) 普遍性、そして (c) 究極の関心事と献身との質である。

(a) 第1に、サイエントロジーの宗教的使命は、すべての人を対象とし、誰にも開かれている聖なる使命として構想されている。同様に、聖書のアモス、イザイア、エレミアなどの預言者は、広く国々に平和と正義、愛を広める使命があるとの啓示を受けた。また、紀元前2世紀以後の仏教伝道団は中国、インドシナ、インドネシア、韓国、日本を含む極東全域に仏陀の言葉を広める使命があると感じてきたのである。今日、日本の仏教伝道団は、ヨーロッパやアメリカにその教えを広めている。また同様に、ナザレのイエスは自分の福音を伝えるという目的があると考えた。だから、弟子たちをあらゆる国々に送り出したのである。イスラム教の伝道団的側面は実に強く、今日、とりわけアフリカと東アジアにおいて、世界の伝統的な宗教の中では最も急速に信者を増やしている。新しい文明を築くために惑星を「クリアー」にする努力において、サイエントロジーの伝道団の努力は、完全に古い偉大な宗教の特徴に合致する。

(b) 第2に、サイエントロジーはその使命を世界的な規模で考える。そのため、世界の至る所に伝道所を設置し、世界中のどこでもオーディティングやトレーニングの技術を受けられるようにしようとしている。古い伝統的な宗教との最も明瞭な類似は、キリストの弟子たちへの「あなた方は行って、すべての国民を弟子として、父と子と精霊との名によって、彼らにバプテスマを施しなさい」（マタイ第28章19）という命令であろう。紀元前8世紀、ユダヤ人の預言者アモスは、ユダヤとイスラエルだけではなく、イスラエルの造物主である神への信仰を共にしていなかったカナン都市国家の異教徒（ダマスカスやガザ、アシュケロン、テュロス、シド、エドム）にも、神の言葉を伝えるよう命じられた（アモス第1·2章）。今日イスラム教徒は、予言やマホメットの言葉が普遍的なものであるという信念から、ロンドンやロサンゼルス、トロント、さらにはソウルにまで本格的なモスクを設けている。同様に、仏教やヒンズー哲学の指導者たちは、自分たちの尊い教えや生き方を海外にもたらしている。それというのも、自分たちの教義が普遍的な価値を持つものであると信じているからだ。この点でもやはり、伝道

団が人類すべてのためになると信じて、オーディティングやトレーニングの技術を世界的に広めようとしているサイエントロジーは、古い歴史を持つ宗教と同じ方向に向かっている。

(c) 第3に、サイエントロジーが打ち込んでいる目的は、文明の流れがより良い方向に変わるのに十分なだけの人々が、クリアーになるのを助けるということである。この目的は究極的な志しと献身という特徴を備えている。古い偉大な宗教のいずれもが、信者に世界的規模で宗教的な使命を至急に、何としても達成するように強く動機付けるような教義の核を持っている。

仏教徒にとってその教えの核心は、煩悩からの解放「解脱」(moksa) と無我「涅槃」(nirvana) への到達という宗教概念に要約される。仏教の経典「Dhammapada」で、仏陀は「(私の古い家の) 梁はみな折れた、屋根の梁は折れた。私の思いから迷いは消え去った。煩悩の消滅は成し遂げられた(第154節)」と宣言している。この覚醒の究極性が、仏教の僧や伝道団を突き動かしてきたものであり、現在も突き動かしているものなのである。

先に述べたように、サイエントロジーの過去世に対する信条は、仏教の輪廻 (samsara) と深く結び付いている。同様に、サイエントロジーの「クリアリング」という概念は仏教の解脱 (moksa) に近似している。過去の仏教伝道団があらゆる人間を煩悩から「解脱」させようとしたように、サイエントロジーの伝道団も、普遍的な生存、平和と豊かさを妨げるエングラムから解放され「クリアー」になることによって、自由になる機会をあらゆる人に与えるために働いている。

日本の禅仏教はすべての人々に悟り、あるいは「突発的な啓示」を得させようと願い、その強い信念からアメリカやヨーロッパに寺院を設けた。イスラム教ではshahada (アラーのほかに神はなく、マホメットは神の預言者である) という言葉に要約されるマホメットの言葉の絶対性を確信して、イスラム教の伝道団が世界的規模で改宗者を集めている。聖書の教えの中では、過去から現在にわたって伝道活動を進めさせてきた最も説得力のある信条は、神がすべての人類の全般的な罪のあがないと、最終的な救済を願っているという深い信頼である。それゆえにイザヤは、すべての人が唯一の神を礼拝する天上のエルサレムを地上につくり上げることが、すべての国々に対する神の救済であると捉えた。(イザヤ書第66章：22-23)

新約聖書で神がイエスを通して行った許しを、使徒パウロは、単にキリスト教徒や全人類の救済のみではなく、宇宙それ自体のあらゆるものの解放、復活、再生の約束として捉えた (ローマ人への手紙第8章：19–23)。この点で、文明を再生させるために「惑星をクリアーにする」というサイエントロジーの使命は、世界の歴史ある偉大な宗教の動機と信仰とを特徴付ける確信の絶対性に照応するものがある。

III.
宗教的実践

宗教的実践という点で、サイエントロジーは、世界の宗教に見られる典型的な宗教儀式の形態、例えば、加入の儀式または洗礼（サイエントロジストは「ネーミング」という）、結婚、葬儀、その他を持っている。しかしながら、サイエントロジー独特の中心的な宗教的実践はオーディティングで、これはローマ・カトリック、仏教、ヒンズー哲学に見られる段階的な瞑想に対応すると言える。オーディティングとならぶサイエントロジーのトレーニングについてはIII（b）でもっと詳しく述べよう。

(a) オーディティングは宗教教育的な過程で、精神の案内人（訓練されたサイエントジーの聖職者たち）が、信者を精神的に啓発された状態へと導く。サイエントロジストは、オーディティング・プロセスの段階を能動的に通過していくことによって、魂、またはセイタンを、複雑な悩み、すなわちエングラムから解放することができると信じている。オーディティングの各段階はグレードまたはレベルと呼ばれ、これらはサイエントロジーの「クラス、グレード、意識のチャート」に示されている。このチャートは、低いレベルと高いレベルの精神的状態の間にある隔たりを比喩的に表している。サイエントロジストは、このチャートを「完全なる自由へのブリッジ」、または簡単に「ブリッジ」と呼んでいる。「ブリッジ」は、精神がマイナスの「存在していない」から中間の「コミュニケーション」、「啓発」、「能力」を経て、最終的に「クリアリング」、「源」、そして究極的には「8つのダイナミックスすべてにおけるパワー」へと連続的に進んでいくさまを描いている。サイエントロジーの宗教的実践の大半が、啓発のためのオーディティングとトレーニング・コースと、教会の精神のカウンセラーであるオーディターの訓練に割かれている。こうした段階的な進歩の過程は、中世のフランシスコ派修道会の神学者、聖ボナベントゥラのキリスト教論文『神へ到る精神の旅』や、イエズス会の創立者、聖イグナチウス・ロヨラの『心霊修業』で述べられている宗教的、精神的な救済の段階やレベルに実によく似ている。オーディティングの精神的目標は、「人生や、考え、物事、エネルギー、時間と宇宙」について自己決断できるようになるために、まず有害なエングラムから「クリアー」になること、そして次に、完全な「機能しているセイタン」（OT）になることである。サイエントロジストは、身体的な病気で医師の診断を仰ぐことには反対しないが、心理的、精神的な魂の治療を助けるどころか、かえって妨げると見ている向精神薬の使用には断固として反対している。

(b) サイエントロジーのもうひとつの中心的な宗教活動はトレーニングで、これには教会の教典を集中的に学ぶことも含まれる。トレーニングの重要な要素のひとつは、信者にオーディティングを行うことのできる個々のオーディターの養成にあるが、オーディターの訓練はまた、個人的、精神的に重要な要素をも含んでいる。後で述べるように、この精神的な要素は、サイエントロジーとアジアの宗教が、西欧の宗教で中心的な祝祭的礼拝よりは、瞑想や教育的な礼拝を重視していることと調和している。サイエントロジーの教義では、信者がブリッジの段階を昇っていく上で得る精神的な恩恵の半分は、トレーニングに負うものだとしている。

IV.
教団

私の知る限りの宗教と同じく、サイエントロジーには社会生活と、教義を維持し、表現し、宗教活動を世話する教会組織がある。教会という観点から見ると、サイエントロジー教会の組織は会衆的というよりは階層的である。会衆的な宗教では、教会組織についてばかりでなく、教区で司祭を選出し、教義（信教）の改善や宗教活動について投票して権利を行使する。合衆国内のプロテスタント各派のほとんどは会衆的な組織である。そこでは、いわば、底辺から権利を行使するのである。それに対して階層的な宗教では、ローマ・カトリックの法王やチベット仏教のダライ・ラマのような中心的な宗教的人格者や教会会議、長老会議といった執行機関がその権威によって、上からの叙任、任命を行う。私の見てきたところ、サイエントロジー教会は古典的で階層的な教会組織に従っているようだ。

ここで、サイエントロジー教会の組織を簡単にまとめてみよう。1986年に亡くなったL. ロン ハバードは、サイエントロジー教義、上級OTレベルを含む、技術の唯一の源であったし、これからもそうあり続けるだろう。サイエントロジー教会の最高権威は、国際サイエントロジー教会（CSI）とリリジャス・テクノロジー・センター（RTC）にある。CSIは本部教会であり、サイエントロジーの教義を世界中に広めることに責任を持つ。RTCの最も重要な機能は、サイエントロジーの技術の純粋性を保ち、維持し、守り、教義に則って、正しく倫理的に伝えられることを保障することにある。RTCはローマ・カトリック教会の聖省によく似た役割を果たしている。

国際サイエントロジー・ミッション（SMI）は、世界中の伝道所の本部教会として機能する。この構造は、ボストンのファースト・チャーチ・オブ・クリスチャン・サイエンスが、他のクリスチャン・サイエンス教会すべての本部として機能しているのに極めてよく似ている。バチカンとそこにある委員会とが、ローマ・カトリック教会において最終的に判断を下す機関であるように、あらゆる教義上の論争について、RTCがサイエントロジーでは最高かつ最終的な抗告機関である。

シー・オーガニゼーションについてもここで触れておかなければならない。シー・オーグは、この生と未来の無数の生において教会に仕える決意を示して「十億年にわたって」献身することを誓ったサイエントロジー教会の会員によって構成されている。シー・オーグは、サイエントロジーにとって、ローマ・カトリック教会におけるイエズス会のような存在になっている。つまり、教会の指導者の大部分はシー・オーグ階級から成るのである。

サイエントロジーは時に自らを「応用宗教哲学」と称する。この句を引いて、サイエントロジーは宗教ではないと主張した人々もいた。しかし、前にも述べたように、私が教会の教えを調べ、信者と面談した結果は、サイエントロジーがこれまで存在した世界中の宗教に共通して見られる特徴を、すべて備えていることが明らかになった。すなわち、よく整った教義があり、宗教活動を行い、階層的な教会組織を持っている。その上、「哲学」という言葉には複数の意味があり、「宗教」と全く相容れな

いというわけではないのである。文字どおりには、哲学という言葉は「知の愛」を意味し、人類の知るあらゆる宗教は、ある種の「知恵」または究極的な真実についての洞察を説いている。サイエントロジストとの会談では、信徒たちは「哲学」という言葉は、宗教的な観点から見ると、人生や宇宙の究極的な意味を表すと考えていることがわかっている。サイエントロジストにとっての「哲学」は、魂は不死であり、永遠に生き続けるものだという教義に依拠している。哲学的な概念を利用し、教えの実際的な応用を重視するという点で、実際、サイエントロジーは私の知っている他のどの宗教とも異ならない。宗教はいつも哲学と結び付く。かの偉大な「神学大全」で、ローマ・カトリック教会史上最大の神学者、聖トマス・アキナスは、ギリシャの哲学者アリストテレスから無数の哲学的概念や用語、構成概念を借用した。こうした「哲学的」概念を正しく用いるよう勧めたが、だからといって「神学大全」が最高の神学文献であることを否定する者はいないだろう。「応用宗教哲学」という表現は、どんな意味でも、サイエントロジーが言葉の完全な意味で本物の宗教であることを妨げないのだ。

西欧の宗教、とりわけユダヤ教、キリスト教、イスラム教は伝統的に排他的な性格を持っていた。いずれも独自の律法、救済者、預言者、救いに至る道、あるいは生命の究極的な意味や真実についての解釈を挙げて、唯一の真の宗教であると主張する。この排他的な性格は、ヒンズー教、仏教、儒教、神道、道教などのアジアの宗教には見られないものだ。アジアでは、人はどの宗教が「正しい」かなどという「選択」をすることなく神道の信者として生活し、神道とキリスト教両方の儀式で結婚式を挙げ、ついには仏教の儀礼で葬られるということが可能だ。今日、西欧のキリスト教でさえ、さまざまな宗派が宗派を超えて神学的な対話をし、教会の垣根を越えて礼拝を行っていることからもわかるように、排他性の幾分かを失いつつある。こうした多宗派性は、現在の宗教活動を直接研究している人々には少しも驚くにあたらないどころか、完全に納得できることなのである。サイエントロジーはヒンズー教と仏教の教えによく似た点があるが、だからといって全く排他性がないわけではないし、また、完全に排他的であるというわけでもない。サイエントロジーは信者にそれまで持っていた信仰を放棄したり、他の教会や宗派から脱退することを要求しない。これは現代の多宗派性に合致している。しかしながら、現実的にはサイエントロジストは普通、他の宗教をないがしろにするほどにサイエントロジーの教えに専念するようになる。いずれにしろ、他の宗教を持つ人に対して開かれていることが、サイエントロジー特有の宗教的独自性を損なうことはあり得ない。

V.
サイエントロジー礼拝

あらゆる形の宗教に、全く公平に適用できる厳密な「礼拝」の定義は存在しない。(2) の終わりで、宗教である象徴として、私はどの宗教もある意味で3つの特徴 (教義の体系、宗教活動、教会組織) をすべて備えていると述べたが、ふたつの宗教が全く同じ程度や同じ形を持っているということはない。こうした違いが、それぞれの宗教を独自のものにする。ローマ・カトリック教会、東方正教会、高教会派は衣装、行列、灯明、讃美歌、偶像、聖水、香、その他のものを使った物々しい儀式をきわめて重視する。それに対して、Brethrenのような厳格なプロテスタントの会派では、そうした華美

な儀式形態は明白に偶像崇拝的ではないとしても、いくぶん迷信的だと考えられている。キリスト教の教派のいくつかでは、礼拝は聖書の言葉の説教と、あるとしたら、何曲かの讃美歌と祈祷にまで簡潔化されている。一般にクェーカーとして知られているキリスト友会の礼拝集会では、はた目にそれと分かることは何もせず、無言の集まりで、その中で信者は心に浮かんだことについて短い言葉を交わすかもしれないし、交わさないかもしれない。同様に、仏教寺院での礼拝の中心的な行為は、最高神を崇めることではなく、自己を消滅し、存在の苦しみから脱け出すために、長時間に及ぶ無言の瞑想をすることである。

絶対的で厳密な礼拝の定義を見い出すことが不可能なため、比較研究では柔軟な姿勢を保つことが必要になる。大抵の辞書はこの問題に、礼拝の定義の項目に複数の概念を並べて対応している。まず、礼拝は「儀式」、「礼典」といった概念を含み得る。宗教学者の中には、儀式や典礼には変化させる働きがあると考える者がいる。例えば、キリスト教の洗礼の儀式では、受洗者はひとつの状態（罪）から別の状態（恩寵）へと変化する。未開社会では、通過儀礼は新参者を子供から大人へと変える。サイエントロジーのオーディティング・プロセスの「プリ・クリアー」から「クリアー」への過程は、この意味で変化的である。逆に、式典は確認の働きがあるとも考えられている。すなわち、式典は現状を認め、確認するのである。さまざまな形の安息日や日曜礼拝は、しばしばこの意味での式典である。式典は、信者集団に礼拝団体としての立場と、特定の宗派に属していることを確認させるのである。いつもと言うわけではないが、しばしば、儀式や式典には衣装、聖なるものの散布、浄化、獣や食物の犠牲、祝福などの身振り、その他の装飾的な要素が伴う。

第2に、宗教学者はみな、儀式や式典がそれ自体で礼拝の目的になることはないとわかっている。そのため、大抵の定義は「実践」、「祈り」、「儀式」といった概念を含んでいる。こうした付加的な概念が一般的な定義に加えられているのには、正当な理由がある。ある人の礼拝は他の人には迷信であるかもしれない。ある信者の一見無意味な振る舞い、例えば、プロテスタントにとっての十字を切るといった動作も、他の人にとっては信仰の表れかもしれない。であるからして、学者たちは宗教活動を特定の宗教の全体性、つまり信者集団の最終的な目標や意図といったものの中で見なければならない。研究者は信者が信じていることを信じる必要はないが、本気で宗教現象を理解しようと思うならば、信者が信じるように、その信じる方向に向かって進まなければならない。研究者はただこの姿勢からのみ、特定の教団において、どの祈り、儀式、祝典が礼拝にあたるのかを判断できるのである。

より広義には、礼拝（祈り、儀式、祝典）の定義には、教典の学習、学習の指導、教典の暗唱、それにさまざまな形での宗教指導といった項目を含めることができる。宗教の中にはこうした活動をも聖なる式典の中に含めているものがある。日本の禅寺院では、新参者がものものしく法華経を運び、儀式化された唱和を通して厳粛に暗記しようとしているのを見た。ユダヤ教の小学校での律法の学習でも同じような儀式的な性格が見られる。

さまざまな礼拝の形の中に、ふたつの基本的な傾向を認めることができる。ひとつの系統の礼拝はより式典的で、儀式に重きを置いている。他方はより教育的で、瞑想を重視する。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教といった西欧の主要な宗教の信者からは、果たしてオーディティングとトレーニングは礼拝であると言えるのだろうか？という疑問が自然に起こるだろう。こうした宗教では、礼拝はそれのみと言うわけではないが、主に公共の式典、断食期間、説教、讃美歌、安息日、または日曜礼拝その他のさまざまな勤行から成っている。こうした形の礼拝はアジアの宗教にも数多く見られるが、いくつもの系統の信仰には、瞑想と指導とをより重視するという基本的な傾向が潜んでいる。すでに述べたとおり、ヒンズー哲学や禅仏教では礼拝は式典ではなく、瞑想と経典（sutra）、精神的な教科書の学習とに重点を置いている。禅において、この精神の修業はしばしば公案（禅宗で、参禅者を悟りに導くために与える課題）についての瞑想を伴う。公案とは短く簡潔な言葉である。多くが逆説的で、信者が日常の意識の殻を破って悟りを得る、つまり突然心の目が開くことを助ける。

オーディティングの発見と記述は、L. ロン ハバードただひとりによるものだが、サイエントロジー教会とL. ロンハバード自身は以前から、サイエントロジーは、ヒンズー教や特に仏教のある要素に通じる点があることに気付いていた。サイエントロジーは、救済の主要な過程は無知から悟りへ、束縛から自由へ、そして混乱と迷いから明瞭さと光明への道であるという信念を、これらふたつの宗教の教義と共にしている。何年も前に、私はサイエントロジーと仏教との関係についての著書を発表している。（フランク・K・フリン著『Scientology as Technological Buddhism』、ジョセフ・H. フィッチャー 編集者、『Alternatives to American Mainline Churches』ニューヨーク、パラゴンハウス 1983年 89-110ページ）アジアの伝統と同じく、サイエントロジーは礼拝を式典や祈祷といった形のものとは考えず、きわめて論理的に、意識、悟り、あるいはサイエントロジーの用語を使えば「クリアリング」を重視する瞑想と教育という形で考える。

ひとつ重要なことを付け加えれば、瞑想と教育という形の礼拝が西欧の宗教に欠けているというわけではない。敬虔な正統派ユダヤ教徒は、モーセ五書やモーセの律法を熱心に学ぶことは、唯一の、と言うわけではないが、礼拝のひとつの形であると信じている。それゆえに、正統派ユダヤ教徒は、モーセの五書と律法を恭しく学ぶことに専念する学校を開設する。ユダヤ教の学校は単なる普通教育の場ではなく、礼拝の場でもあるのだ。イスラム教徒は、コーランを専門的に学ぶために、*kuttabs* と*madrassas*をつくった。同様に、多くのローマ・カトリックの修道会、とりわけシトー派とトラピスト会修道士は、礼拝の相当な部分を聖書についての無言の学習と瞑想とに割いている。

しかしながら、全体的には瞑想や教典の学習や指導は、西欧では東洋ほど重要な礼拝の形態とは見なされていない。インドでは、人生の晩年、人々が全財産を売り払ってガンジス河畔のバラナシ（ベナレス）のような聖地に行き、時折儀式的に供物を捧げる*pujas*を行うほかは、ほとんどの時を神に関わる瞑想に費やして余生を送ることが、ごく普通に行われている。一般のヒンズー教徒にとって、そうした瞑想は最高の礼拝の形なのである。

こうした議論とは別に、サイエントロジーが典型的な儀式的、式典的な礼拝形式と独自の精神生活、すなわちオーディティングとトレーニングとを持っていることは明瞭である。比較対照すると、ローマ・カトリック教会は7つの秘蹟（ひせき）の全てを礼拝の形と考えている。だからこそ秘蹟はすべて、主に叙任された僧職者によって執り行われるのである。秘蹟は病人に施すといった特別な場合に限り、教会以外の場所でも行われる。秘蹟には洗礼、堅信、信仰告白、懺悔、和睦または告白、聖餐、病人や老人の塗油がある。しかし、ローマ・カトリック教徒にとって最も重要な秘蹟は、キリストの死と再生、信者の間にキリストがいることを祝う聖餐、俗にいうミサである。

同様に、サイエントロジー教会にも、いわば「秘蹟中の秘蹟」ともいうべきオーディティングとトレーニングがある。サイエントロジー実践者の主要な宗教的目的は、クリアーになって「人生、思考、物質、エネルギー、宇宙、時間」を自分の意志で扱える、機能しているセイタンの状態に至ることにある。そのために最も重要な宗教的手段は、オーディティングとトレーニングの複雑なレベルとグレードである。ローマ・カトリック教徒にとっての聖餐に匹敵する宗教的重みを持つものは、サイエントロジストにとってのオーディティングとトレーニングなのである。ローマ・カトリック教徒が7つの秘蹟を世界救済の主要な手段と考えるように、サイエントロジストはオーディティングとトレーニングを、彼らが言うところの、すべてのダイナミックスにおいて最適な生存である救いへの道だと考える。

「ローマ・カトリック教徒はどこで礼拝するのか」という問いに対し、私は比較宗教研究者として、「事実上、信者に7つの秘蹟が施される所である」と答えよう。また、「サイエントロジストはどこで礼拝するのか」という問いには「事実上、サイエントロジー教典にあるオーディティングとトレーニングとが信者に行われる所である」と答えよう。ハバードのダイアネティックスとサイエントロジーに関する著作が、サイエントロジー教会の教典を成している。こうした著作の大部分は、サイエントロジストの言うところの**オーディティング技術**、経営、オーディティングとトレーニングを信徒に施す方法に割かれている。ハバードの著作の中でのオーディティングの占める重要さだけから見ても、宗教研究者は、オーディティングとトレーニングとがサイエントロジー教会において主要な宗教活動であり、また礼拝の主な形であることを見て取れよう。

比較宗教学者として、私はためらうことなく、オーディティングとトレーニングとがサイエントロジー教義における主要な礼拝形式であり、また、オーディティングとトレーニングとが信者に施される場所が、間違いなくサイエントロジーの礼拝場所なのであると断言できる。

フランク K. フリン
1994年9月22日